

〈第141回 国際ARCセミナー(新垣瑛士氏)レビュー〉 沖縄県南城市におけるデジタルアーカイブ事業

伊丹 稀星(立命館大学大学院文学研究科)

E-mail gr0683fx@ritsumei.ac.jp

1. 概要

本稿は、2025 年 11 月 27 日に行われた「第 141 回 国際 ARC セミナー」における新垣瑛士氏(以下、新垣氏)の講演について報告するものである。本講演では、南城市教育委員会文化課が主体となって展開している「なんじょうデジタルアーカイブ」の計画段階から今に至るまでの経緯や、膨大な史料と地域の人々と連携を活用した活動を中心に述べられた。また、今後の課題における展望も併せて、SNS の活動についても触れられていたので、最後に紹介できたらと思う。以下、その内容に従って紹介する。

2. 設立時から現在に至るまで

本講演では、まず「なんじょうデジタルアーカイブ」事業を発足するにあたっての課題意識と併せて、段階的に実現すべく計画されていたことが語られた。まず、2017 年度に沖縄振興特別推進交付金事業として、教育部で事業計画発案された。続いて、2018 年度に「南城市文化財デジタルアーカイブ実施計画」が立てられると共に、基本方針・理念、スケジュールが策定された。主な作業としては、「主に編さん事業に関する写真、カセット、ビデオ、文書の目録化作業」「東京国立博物館、VR/AR 事業者などの先行者の県外事例視察」「産官学のアーカイブ実践者による検討委員会の開催」「博物館、図書館、学校などへのアンケート調査」が第一段階として挙げられた。そして 2020 年度にデジタル化やシステム構築に着手し、観光向けコンテンツ制作の土台が形成されていった。2021 年度にデジタル化、資料の公開追加。さらに、2022 年度には出土品 3D 追加され、以降継続的にデジタル化、テキスト化を実施している。その功績が認められ、デジタルアーカイブジャパンアワード受賞し、後でも言及するとして、現在は SNS の活動も積極的に行なっている。

2-1. 設立時の課題意識

南城市には、琉球発祥の説話に関する史跡や場所が多いことが挙げられる。本デジタルアーカイブ事業の根幹には、市史編さんの要素も含まれていることから、琉球王国の正史が南城市に大きく関わっていると

考えられた。

世界遺産の斎場御嶽、国指定史跡の知念城跡など、多くの国指定文化財があるにもかかわらず、博物館に相当する施設がなく、展示や教育普及の機会の喪失が危ぶまれていた。また、市の歴史や文化財を効果的に活用すべきであるという問題意識もあったことから、初期の段階でこれら史跡などを、先端技術を用いたコンテンツに用いるべく想定されていた。

2-2. デジタルアーカイブ実施計画

本アーカイブにおいて、「アーカイブの基礎・土台をしっかりと整えなければ、効果的な活用はあり得ない」という信条が根底にある。それは計画段階の周囲関係者も概ね同意であり、新垣氏は先端技術の業者や委員会の助言において、目先の先端技術に重きを置いたアーカイブではなく、膨大な旧町村史料(資料)の整理による土台整理から始め、デジタルアーカイブのノウハウを民間業者に学び相談を経て、発足する契機としたと述べられた。

真っ先に先端技術に頼るのではなく、中のデジタルアーカイブの土台を整えて地域連携に重きを置くことで、息の長いデジタルアーカイブにしていくのではないかと考え、まずは、写真フィルム・ビデオ・8 mmフィルム・カセットテープ・貴重文書といった、膨大な劣化していく資料のデジタル化が急務とした。リスト化、デジタル化保存をできるように準備するのが要とした。

2-3. 公開の考え方

公開を原則として、公開できない・すべきでない資料について定義するものとした。公開と非公開や 2 次利用のルールを明確化・単純化する。サイトにおける「9.資料の二次利用について」¹⁾この様に明記している。「クリエイティブコモンズのライセンス(CCBY)にもとづき、自由に利用することができます。このライセンスでは、クレジット(出所)の表記を条件とした、資料の複製や再配布、改変が認められています。本アーカイブの資料を用いる場合には、クレジットとして「なんじょうデジタルアーカイブ」と表記してください。」。

とりわけ、写真の資料公開の考え方においては、可能な限り全数公開する方針をとっている。行政が価値

づけをし過ぎないためにも、すべての写真に資料価値があるものとして、見る人(利用者)に価値判断を委ねるとしている。資料は市民の財産であり、物理的な可能な限り公開を目指す責務を第一に、情報の不足を補うために、市民の方々から情報提供を積極的に取り入れる姿勢を見せている。また、著作権や肖像権の考慮が必要になることから、プライバシーポリシー²⁾にも明確な定義がなされているほか、デジタルアーカイブ学会が示した「肖像権ガイドライン」を参考にしつつ、法制部会に所属する法律の専門家らのアドバイスを得る2023年に南城市オリジナルの「写真公開判定マニュアル」が策定された。用を通じてブラッシュアップしていくことを前提としている→あくまで南城市の事情に加味して作っている→yes no フローチャート式にしたりして、わかりやすいものになっている。(参考:【概略版】なんじょうデジタルアーカイブにおける資料公開の考え方—写真編—)

3. デジタルアーカイブ実施計画

本アーカイブを構想するにあたって、3つの具体的なデジタルアーカイブの活用イメージがなされた。「観光における誘客素材、文化財の解説素材」、「学校教育および生涯学習における地域学習素材」、そして最も重きを置いている「市民による歴史文化に関する情報発信」としての活用を目指している。事業関係者だけでなく、南城市民が参加して「つくる」ことのできるデジタルアーカイブを目指したのである。

3-1. デジタルアーカイブシステムの構築

2020年度システムの構築を開始し、管理システムには、早稲田システム株式会社の「I.B.museum SaaS」、Webサイトには、デザイン性の統一感を図るために、CMSの要素を合わせた「ワードプレス」を取り入れて制作した。また、「I.B.museum SaaS」のAPI連携機能を用いてWebサイト側に表示できるようにする、デザイン性の統一、コラムの表示が可能となった。

デジタル化作業では、写真フィルム、カセット、文書など劣化が懸念される資料から優先的かつ大量にデジタル化し、2023年度までに市所蔵、個人提供などの資料約16万件をデジタル化した。

3-2. 「なんじょうデジタルアーカイブ」開設

2021年3月23日「なんじょうデジタルアーカイブ」³⁾が開始された。写真、動画、音声、文書、3D、テキストが収録され、旧町村の「広報誌」のテキストの検索も可能となっている。また、コラムや資料紹介の掲載をしており、2021年10月8日よりジャパンサーチと連携を開始した。

本アーカイブで扱う資料として、市(合併前旧町村)が所蔵する資料広報誌・写真や市町村史関係資料、文化財(地籍図、古文書等)、震災・移民関係資料と

いった地域資料、地域/利用者から提供してもらった資料、あらたに撮影・作成した資料が挙げられる。特に、あらたに撮影・作成した資料として、YouTubeに掲載を通して、海底火山の噴火によって押し寄せた軽石の写真、現在進行形の南城市の情報のアーカイブも肝要になるとしている。

ジャパンサーチから本アーカイブ本体への流入は5%程度であり、今後の展望に期待されている。ギャラリー機能を活用し、閲覧者が南城市に興味を向けるきっかけとなることを目論み、世界遺産の斎場御嶽と「久高島の歴史と文化」をギャラリー化するなどの活動が進められている。アーカイブ本体の利用者増加につなげる工夫として、事業関係者でなくとも利用者が資料を引用して解説記事を作れるようにしたり、利用にあたって引用表記さえあれば自由に利用可能にしたりといったものが挙げられる。

設立当初は1,000件弱だったアーカイブ数が、15,444件(2024/11/25時点)に増加し、閲覧者は2023年に125,921人と過去最多となっており、年々増加傾向にある。

3-3. 「なんじょうデジタルアーカイブ」の活用事例

本アーカイブの運営を通して見えてきた課題として、デジタル化した資料を機械的に公開していくだけでは、利用者は増えないという結論に至った。その改善案として、資料を利用した特集記事や動画を作成し、YouTubeのスライドショーでわかりやすく市の歴史や文化を紹介する、公開スパンを縮めるべく定期的に新資料を公開する、地域、時代、分野が偏らないように配慮して、多様な資料を提供する、研究・教育機関と連携した情報収集を行う、各種SNSを活用した積極的な情報発信を行う等の、多様な取り組みがなされた。

観光の活用例として、「南城アーカイブツーリズム」⁴⁾が挙げられる。古写真を活用したまちなかの歴史探訪系コンテンツとして、各所の文化財マップにQRコードを設置し、それを読み取ることで、その場所の古写真+エピソードを楽しむことができる取り組みである。現在200点余りの写真、映像を公開しており、一部には日本語、英語、中国語のナレーションも搭載している。

教育的観点における活用例として、市の佐敷津波古区にあるフリースクールの「珊瑚舎スコーレ」と協働した取り組みが挙げられる。参加した中等部の生徒らに、地域の人達がまちあるきで地元の歴史を学ぶ補助を行い、写真提供を通して、生徒たちが、選んだ写真をもとに地域住民に聞き取りを行う取り組みである。聞き取り調査の成果は、中等部の生徒名前と解説を本アーカイブで公開し、サイトの充実化に繋げている。さらに、本アーカイブを用いた教育普及の活動として、市内の小中学校教員に沖縄戦についての聞き取り調査の成果をもとに、沖縄戦についてどのような授業を行うかを会議し、証言と一緒にレポートとして提出公開し

ている。

事実、「なんデジ」開設後は地域住民にも知られる機会が増え、個人からの資料提供も増加している。原則として、速やかに公開し、現物は返す体をとっている。すべてが貴重な資料であり、寄贈者の名を冠して「〇〇コレクション」として整理される。さらに、米国からの資料提供もあり、南城市だけの写真でなく、死蔵化を避けるためにも社会全体の利益のために、全国各地の写真は提供があった場合も、コンテンツに広がりをもたらすためにアーカイブし、公開している。

3-4.大学との取り組み

本アーカイブ事業は、2022 年から 2023 年にかけて、高橋そよ准教授指導の下で琉球大学民俗学ゼミと共同フィールドワークが実施された。2022 は市玉城字前川、2023 は市佐敷字富祖崎で実施され、学生たちの聞き取り調査の成果は「なんデジ」で公開している。これらの地元大学との連携は、デジタルアーカイブ事業の普及と、歴史の蓄積の貢献の重要性を市民に気づいてもらう、資料提供に繋げていくねらいを大いに含んでいる。また、2024 年 11 月 22 日、京都大学人文科学研究所と本市教育委員会において学術連携協定を締結したことも取り組みとして大きく取り上げられるべきであろう。未公開になっている資料が約 150,000 件あり、担当者管轄外の専門知識を要するものもある。それらわ、学術機関に提供し、研究材料として使ってもらうことで成果を市民に還元することを目的としており、今後の連携に期待されている。

4. 市史の繋がり

新垣氏の所属されている南城市教育委員会文化課には、市史の編さんの任も担っている。一般的に、市町村史は刊行までに長期間かかってしまい、以前は公開までに十数年の年月を経ることもあった。本アーカイブ事業は、そのような問題を解決するべく、調査成果の死蔵化を防ぐとともに、データ上なら出版物とするまでに訂正を重ねることも可能となる。そのほかにも、文化財 3D モデル、オーラルヒストリーの連載などデジタルアーカイブを通して、Web 環境を可能な限り活かそうと試みている。

5. 今後の課題

第一に挙げられたのは、担当者が替わる際のノウハウの伝授が難しいことであった。それによる公開作業の停滞が危惧され、システムフローの見直しの伝授や、それを考慮した後任の人材確保が憂慮されている。“今を記録する”という点にも重きを置いていることから、特集「地域行事の“いま”」で、コロナ禍の地域行事のレポートの公開や、他でやったワークショップのレポートとワークシートの公開を、短いスパンで公開することを心掛けている。しかし、撮影から全て職員が行うという

のもあり、公開までの道のりがどうしても長くなることがある。

また、教育分野での活用において、市内小中学校との連携が十分でないことや、これは全国的にも言えることであり、磁気テープや HD に入ったデータの長期保存・管理・移行が課題として捉えている。さらに、HP の構造など今後どのように発展していくかについて、歴史資料館の設置の本格化に伴って、所蔵資料管理システムの兼ね合いも検討していく必要がある。

しかしながら、講演内の講評で弊大学の赤間亮教授は本アーカイブについて、目先の先端技術に頼らず、膨大な資料を整理するところから土台固めをした上で、独自のスタイルで行うという基本姿勢を高く評価していた。さらに、Instagram、Facebook、X(旧 Twitter)、YouTube といった SNS 運用も特筆するべきものがある。

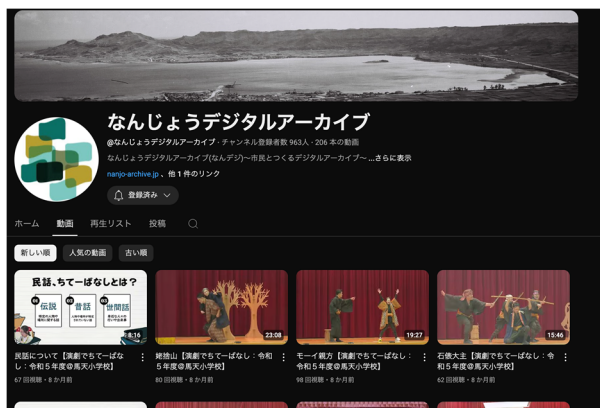
YouTube⁵⁾では、ドローンを用いた史跡巡りや、自身が実際に参加した地域行事の記録だけでなく、地元の民話を題材とした演劇を小学校で公演した際の映像記録も記録するという、地域の今と昔の繋げるアーカイブにおいて、重要な役割を果たしていると考える。また、冊子化するにあたって苦戦していた、戦争体験証言を映像のまま収録することで、映像からでしか得られない情報のアーカイブにも成功している。

また、市史編さんの事業成果としても、2025 年 2 月 12 日に、2024 年度『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』の公開を通して報告しているほか、SNS では定期的に公開情報を掲載していることから、提供者にとっても進捗がわかりやすく安心できる仕様になっている。

今後の発展に大いに期待すると共に、学び合う環境にあるため、精力的に取り組んでいる SNS 活動を参考にしつつ、活動を応援していきたい。

[注]

- 1) 「なんじょうデジタルアーカイブ 利用規約」
<https://nanjo-archive.jp/terms/>
- 2) 「南城市 プライバシーポリシー」
<https://www.city.nanjo.okinawa.jp/privacy/>
- 3) 「なんじょうデジタルアーカイブ」
<https://nanjo-archive.jp/>
- 4) 「南城アーカイブツーリズム」
<https://nanjo-archive.jp/archivetourism/>
- 5) YouTube 公式サイト
<https://www.youtube.com/@なんじょうデジタルアーカイブ/videos>
- 6) 当該ポスト
<https://x.com/NanjoArchives/status/1889542021892960455>



画像:YouTube 公式サイトより

〔参考・引用資料〕

- ・なんじょうデジタルアーカイブ公式サイト
- ・【概略版】なんじょうデジタルアーカイブにおける資料公開の考え方 ―写真編―
- ・【年報】『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』
2025 年 2 月 12 日更新
<https://nanjo-archive.jp/feature/2737/>
- ・「JAPAN SEARCH 久高島の歴史と文化」
https://jpsearch.go.jp/gallery/okinawa_nanjo-O12QoVzMvrd
- ・「南城アーカイブツーリズム」
<https://nanjo-archive.jp/archivetourism/>
- ・「デジタルアーカイブを活用した地域学習～珊瑚舎スコーレ中等部での取り組み」 2022 年 3 月 1 日更新
<https://nanjo-archive.jp/feature/709/>
- ・「2022 年度デジタルアーカイブを活用した大学教育プログラム～琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科・琉球民俗学野外実習での取り組み」2023 年 2 月 17 日更新
<https://nanjo-archive.jp/feature/1737/>
- ・「南城市教育委員会と京都大学人文科学研究所が学術連携協定を締結(2024/11/22)」
2024 年 11 月 25 日更新
<https://www.city.nanjo.okinawa.jp/nanjo-diary/1732517493/>